

作品タイトル…給食の食レポ

筆者名…うたかた

あらすじ…林美雨が部長をしている、文学部は最少人数でもっている。美雨、男子一名、あとユレイ部員の神原さんだ。しかも彼女は学校も休んでいる。ある日、顧問から「毎日、手紙を書いて彼女の家に届けて欲しい」とお願いされた。美雨は手紙を毎日ですが、彼女は学校に再び来るのだろうか。

本編の文字数…三九九一文字

神原美紀が中学に来なくなってから、はや三週間ほどたっていたらしい。彼女の近所住まいで同学年の私だが、クラスが異なるため知らなかった。接点としても同じ文学部ということくらいだし、仕方がないだろう。くわえて、神原さんはうちの中学の、各々がどこか部活に所属すること、という学則に従って籍を入れているだけ。幽霊部員なのだ。

なので、顧問の佐藤先生が図書館個室で「ああ、神原さんあと十日のリミットだ」と、意味深につぶやいても無視をした。しかし英語ではないタイトル ファッション雑誌を広げ、ちらちらとこちらを見てくる先生の圧には勝てず、仕方なしに尋ねた。

「なんの十日ですか？」

「彼女、不登校になって二十日が経つよ。これが三十日になったら公立高校の入試で不利になっちゃう」

大げさなため息をつく佐藤先生に、私は嫌な予感がした。大人が話すこういう口調は次に――

「だから林さんにお願ひがあるんだ」

予想を超える速さで、先生がお願いごとの口火を切った。

「文学部として毎日、手紙を書いて彼女の家の郵便ポストに出してくれない？ 部活動の一環だと思って」

両手を合わせて、先生が私を拝む。不精なのかなんなのか、雑誌を持ったままなので、両手の間でファッション誌がくしゃくしゃだ。

部活動の一環と言うが、我が部は夏の文学コンクールへ向け執筆するぞ！

といった本格派ではない。作品も書いたこともない。せいぜい放課後、読みたい本を選んで感想を話し合うくらい。

部員だって幽霊部員の神原さん、感染症でここのところ休んでいる男子、あと私の三名。わが校きつての最弱部活だ。

「えっ。毎日、手紙を書いて出すすか？ 神原さんと私、そんなに仲よくないですよ。逆効果で、私が嫌われませんか」

「同じクラスの彼女の親友からはお知らせや課題、学級日誌を届けてもらっている。でも無しのつぶてで。まさかこんなに日数が経つなんて。私も新しい作戦を取らざるを得ないんだ……。毎日の出来事とか数行でいいから。できたら返事をください、って最後に書いてさ。お願いお願い」

いつも私が自己嫌悪に陥るポイントなのだが、人からの依頼をほぼ断れない。仕方ないからやるよ、と言って後悔することばかり。今回も十日間、数行手紙を書くだけであれば……。できるか、という考えに至ってしまった。しぶしぶ引き受ける。

佐藤先生の手から解放されたファッション誌が、折れ曲がったまま机上に放りだされる。「やった！ ありがとう」という言葉と共に。

*

次の日から、私は頭を悩ませた。

神原さんは隣のクラスだ。だから、うちの担当教員の話は通じない。面白かった友達について書いて書いても、誰か分からないだろう。人物系は駄目。かといって授業については、後でプリントかノートでもらうそうだし。

思い余った私は天気の話を書き、便箋を丸めてポイツと捨てた。こんな部屋から窓を見れば分かる話だった。これは思ったより難題だぞ。神原さんが親友からは聞けない話で、毎日変化があり、文学部ならではのもの……。

そうだ、給食だ！ 私ははたと膝を打つ。お昼の楽しみ。食いしん坊の私の名文で、神原さんの心も動くだろう。『今年はまだ〇〇は食べてないから、私も食べたい。ヨダレが出るほど美味しそう。巧みな文章だわ』と返事をくれるかも。

だが、この名案に対する顧問の反応は芳しくなかった。

「うーん。確かにクラスが違うし、共感を得る話は難しいわね。でもたとえば『今日の佐藤先生はファンドの乗りが良くて、二割増しで綺麗だった。どう思う？』とかどう。私を使ってもらって」

私は、前向きに検討します、と生返事をした。意気揚々と書きあげた手紙を持って帰路につく。神原家のポストにそれを入れた。

『神原さんへ 文学部部長の林美雨です。今日から毎日、神原さんあての手紙

を書いて届けます。日々の喜びである、給食について感想をつづりますね。もし、できたら返事をもらえると嬉しいです。

今日の献立ですが【ぶりの照り焼き・青菜・豚汁】でした。特にぶりの照り焼きが美味しかった。醤油に砂糖、みりんを合わせた甘いタレが付いていて。私は照り焼き系を全般的に愛しているなあ。噛むとほぐれる柔らかかな、ぶりをおかずに食べる白米は最高でした。神原さんはお昼に何を食べましたか？ それでは、また明日』

二日目の下校時間。私は神原家の郵便ポストを、わくわくしながら開けた。私の手紙への感想文がないだろうか、と。

文学部の部長でありながら、物書きがこんなに人の感想を欲する生物だとは知らなかった。初めて気がついたが、人にあてて書いているのだから、反応が欲しいものなんだなあ。

しかし、ポストのなかは空っぽ。昨日、私の書いた手紙はないので、一応引き上げてはくれたようだが。寂しく思いながらも、二日目の手紙を入れておく。

『神原さんへ 林です。今日の献立ですが【鮭とほうれん草のシチュー・大根のそぼろあんかけ・ツナマヨサラダ】でした。今日の推しおかずはありません！ というのも、シチューは美味しいのですが、主食がご飯だったからです。温かいシチューにはバターを染みこませたパン。普通それでしょ。相棒のいないシチュー君は、本来の力を出し切れなかったと思います。無念。それでは、また明日』

三日目の放課後。図書館で手紙を書きおえ、先生に状況を報告する。初日に渾身の手紙を投函したこと。しかし、翌日に返事はなかったこと。

はあく、と言う先生は気落ちしている。手には女性誌を握っていた。「クラスの友達にも連絡ないし、文学部の奇策も効果を得られずか。あと一週間だ。まあ、でも続けましょう」

我が顧問は、弱々しい笑顔を見せる。先日、駄目にしてしまったファッション誌を弁償させられたそうだ。それも元気がない一因か。「文学部の責任者が本を大事にしないでどうするんですか」と、図書委員にド正論をかまされた教員はそりゃへこむだろう。

ん。今、奇策って言った？ 一般的ではない、奇をてらった策略？ 私の努

力は奇妙なのか……少し気にかかる。そりゃ、戦国武将が予想外の戦略で勝ちをもち取ることもあるんだろうけどさ。正統派じゃないというのは悲しくないか。もやもやが心にこびりついたまま、部活は終了していった。

帰り道、神原家のポストへ三通目の手紙を入れる。今回は【わかめご飯・肉じゃが】の強力コンビについて熱く語った。とその時、私の目に便箋が飛びこんだ。もやもやした気持ちたちが消し飛ぶ。便箋には黄色い付箋が貼ってあり、
『林さんへ 返事』と書いてあったから。

私はそれをすばやく取り、足取りもかるく帰宅した。

さっそく自室でわくわくしながら、便箋を開く。

『林部長へ 神原です。手紙をありがとう。学校生活に一切触れず、給食一直線の感想文。思わず笑ってしまいました。保健室登校をして給食だけ食べに行こうかなあ。でも部長。TVで芸能人の食レポを見た方がいよ。読者が味を想像できて、食べたいと思わせないと。部長の手紙からは味がしませんでした。無味です』

待望の返事を読んだ私は、両手をわなわなと震わせた。勿論、怒りのあまりだ。文学部長を小ばかにしやがってー。

翌日、私は登校時に神原家のポストに手紙を入れた。昨夜に書きあげた挑戦状である。文章は次のとおり。

『神原さんへ 分かりました、部員からの下剋上ですね。その挑戦うけてたちます。学校に給食を食べに来てください。放課後に食レポと一緒に書いて、その場で実力を判断してもらいましょう。佐藤先生には判定を頼んでおきます』

そうして驚いたことに、神原さんは二十四日振りに学校に来たのだ。お昼休みに隣のクラスがざわついていると思ったら、彼女が来ているという。昼食を食べ、さも当然のように午後の授業も受けたらしい。

帰りの会が終わった後、私たちは図書館で部活動をおこなった。久しぶりに彼女の顔を見たが、やつれているわけでもなく普通に綺麗だった。失礼な手紙への怒りも忘れ、感心するほど。

佐藤先生の前で、今日の給食への感想文を書く。今日の献立は【夏野菜のカレーライス・フレンチサラダ・葡萄ゼリー】なので、カレーライスについて。まず先生は神原さんの手紙に目を通した。ほう、と感心した声をだしたり、ふむふむと頷いている。次に私の書いた手紙を手にとった。神原さんのものを

私に差しだす。

『まず見た目だが、艶やかな輪切りのナスの断面と、赤いパプリカが食欲をそそる。香ばしい匂いも同様だ。一口、匙を口に運ぶと、まるやかな味わいが口に広がった。米の一粒一粒がはらと口でほどけ、とろみのあるルーと絡み合う。辛さも程よくちょうど良い。水でのどを潤せば、いくらでも食が進みそうだ』

まあまあだな……ちよつと、いや、だいぶ私より上手かもしれない。

次に、私のカレーライス讃美文を読み終わった先生は

「これは神原さんをヨイショする訳じゃないんだけど」

と言つて、遠慮がちに対戦者の右手を持ちあげた。——私は負けたのだ。部長なの。ふふん、と自慢げに神原さんが鼻を鳴らす。ぐぬぬ。

それからというもの、彼女は給食の時間に学校へやってきて、午後の授業を受けていた。放課後は私と食レポバトルだ。数日たつと、遅刻ギリギリながら朝から登校するようになった。

しばらく後で、私は母から事情を聞いた。神原母がうちにお礼に来たそうなのだ。「娘は朝起きられなくなる、起立性調節障害というものになった。昼前には気力が起きるのだが、午後から学校に行こうとも思えない。だから、給食という切っ掛けをもらって感謝している」とのこと。

人生、何が有難がられるか分からないものである。

とはいえ私も美紀ちゃんという文学部のライバルができ、初めて部活に燃えている。放課後が楽しみになった。特に明日の【チキンライス】は大好物なので、食レポバトルには負けられない。今から勝つための文章を練っている。